

アメリカで明日の学校を考えた

チャータースクールの可能性

中間真一 H R R 社会研究部 主任研究員

学びの場としての学校が、大きな変化を遂げようとしている。知は、学校の授業を通じて、上から下へのみ流れていくものではなくなりつつある。学びの主体、主体をとりまく家族、地域社会、みんなが共に学びあえる場として、新たな学校が生まれようとしている。よくも悪くも、アメリカはフロンティアスピリットにあふれている。

チャータースクールへの疑問

80年代後半にアメリカで生まれたチャータースクール運動は、公的サービスとしての教育の領域に、市民、NPO、大学、企業といったさまざまなセクターからのニューカマーを迎え、さまざまな問題と直面し解決しながら約10年間の歩みを進めてきた。まず、このチャータースクールという学校制度について、その要点となるポイントを挙げると次のようになる。

公費が支出され、授業料の徴収や選抜試験のない、公立学校である

保護者と子どもに学校選択の自由がある
設立者(市民)が、自治体の教育委員会と学校運営
教育方針について契約(チャーター)を結ぶ
市民(保護者、教員、住民)が、学校運営に主体的に参画する

学校の設立、予算立案と執行、カリキュラム編成、校長ほか教職員人事権などを含めた学校運営の自律性が確保される
開校目的(学力向上、学習機会の増大、革新的教授法など)が明確化されている
安全確保、人権保障を除き、諸規制の適用を免除される
学校は、年次報告の公表などを通じて、運営に関する説明責任を負う

一定の結果評価を達成できない場合と運営財務管理、生徒の確保に失敗した場合は、閉鎖あるいは一般の公立校に転換する可能性がある

(天野一哉氏資料より)
ただし、これらはアメリカ全土で共通



しているものではない。アメリカでは教育は州政府の管理下にある。よって、州ごとにチャータースクール制度は整備され、推進事情もさまざまである。州法を定めて最初にチャータースクールを設置したミネソタ州のように、その後もチャータースクールの勢いが高まる一方の地域もあれば、いまだ州法を定めていない地域もある。現在、39州とコロンビア特別区に設置を認める法律が制定されており、州によって評価はさまざまだ。全米におけるチャータースクール数は、

ベネッセ・コーポレーションの水谷昌弘氏の調査によると、2001年現在、約

2500校にのぼるとされ、増加傾向にある。しかし、全米の初等中等学校の中では2.7%程度に過ぎない。

2002年5月、私はチャータースクール事情に詳しいNPO法人、21世紀教育研究所の主催する、チャータースクール視察に参加する機会を得た。チャータースクールの現場を訪ね、これまでの断片的な情報を編み上げ、これからの日本の学びの場としての可能性を確認できればと、アメリカに向かった。

視察は、チャータースクール発祥地のミネソタ州から始まり、リースクールのメッカともいえる、マサチューセツ

州のサドベリー・バレー・スクールで結ばれた。今この視察を振り返るときこのスタートとゴールの意味は大きかった。今回の視察に際して、私はぜひとも体感レベルで確かめたい次の3つの疑問があった。

なぜ、公立でも私立でもなく、チャータースクールである必要があるのか
プロジェクト型の学びのあり方で、子どもの将来を支えきれぬ知識基盤ができるのだろうか

すべてが自由で、自己決定で毎日過ごすサドベリー・バレー・スクールで、幼少期から子ども時代のすべてを過ごすことは、社会に生きる人間として、真に幸せなのか



ピース・アカデミー

チャータースクールの意味

均一にコントロールされた場の中に、一点でも多様性を持ち込むには、一部を取り出して試験管の中の実験からスタートするというやり方は、いかにもアメリカからしい。失敗するかもしれない「実験」に、親も子どもも当局も、よいと納得できたなら率先して自ら踏み出せる社会だ。チャータースクールは、クリントン政権が公立学校再生の切り札として打ち出し、ブッシュ政権でも支援が続けられている。その実験の価値をいかに見ることができれば、私にとって今回の視察は成功だ。

機内で眠れず、もつろつとしたまま到着した最初の訪問校ピース・アカデミー



ピース・アカデミー 授業風景

(ミネソタ州セントポール)。この学校の子どもたちの60%は、ラオスの山岳地帯から来た移民の子どもたちだ。「尊敬(リスペクト)」を理念に掲げ、教師が行動でそれを示せる学校づくりに取り組んでいる様子

を、校長は情熱的に語った。小学生のクラスで感じられた先生と子どもたちの信頼関係、廊下に掲示された子どもたちの作文、私たちを歓迎する高校生たちのコーラス、「市民による社会実験のフロンティア」に自分が立っていることを実感した。しかし、なぜ、あの校長は、かつて公立学校の校長だったときに、この教育を実践できなかったのだろう」という素朴な疑問がわいた。やはり、そこには自らを投じざる志と、それによって交わされる地域住民との信頼関係が大きい



ピース・アカデミー 歓迎のコーラス

かったということだった。

ミュージカルとしての学び

百聞は一見に如かず、ニュー・カンントリー・スクール(ミネソタ州ヘンダーソン)訪問は、私の「プロジェクト型」の学びへの懸念を払拭した。私は、中途半端なプロジェクト型クラスは、学校崩壊への道をたどるだろうと考えている。日本における年間105時間、週3時間のクラスで、個々の子どもたちが学びの価値を味わえる総合学習をプロジェクトにするためには、教師はその準備に多大なエネルギーを注がねばならないはずだ。これは、従来の延長線上の授業計画や指導を超えた、学びの支援者としての新たな能力も必要だ。

しかし、ニュー・カンントリー・スクールの校長以下、教師たちは、それを実現していた。1プロジェクト5週間(100時間)、1年間10プロジェクトが進められる中、一人の先生が17人分のプロジェクトをアドバイスすることは容易ではないはずだ。私が生徒たちに「先生は何をしてくれるの?」と尋ねると、「プロジェクトプランにアドバイスしてくれる」と答えた。スピーカーを自作しようとしている生徒に、「スピーカーに詳しく



ニュー・カントリー・スクール



ニュー・カントリー・スクール校長 ディー・トーマス氏



ニュー・カントリー・スクール 校舎内の様子



「写真」プロジェクトの成果を説明をする生徒

写真

千葉大学教育学部上杉研究室 松田 厚氏
森 達郎氏
HRI 中間 真一

「先生もいるの?」と聞くと、「いない。ただど誰に聞けばいいか、何を参考にすればいいかを聞ける。音について、自分が考えていなかったテーマまでアドバイスしてくれる」と答える。ネットから知識のつまみ食いをするだけではなく、必ず一つは「コミュニティー」に出かけて、直に地域の人たちの話を聞くようにしているのも素晴らしい。このようなプロジェクトを、その生徒の能力にマッチさせながら、基礎的な知識を織り込みつつサポートしているようだ。この先生たちの「プログラム準備」の労は、強い志と教育の喜びを感じる事ができなければあり得ないだろう。

「自由である」ということの困難
こんな感動とともに、旅の最後にたどり着いたフリースクールがサドベリー・バレー・スクール(マサチューセッツ州フランシスカム)だ。チャータースクールやプロジェクト型の究極の姿が、ここにありと言えるのかもしれない。しかし、アリストテレスの言葉であり、ダニエル校長の理念である、「人間は生まれつき好奇心を持つものである」を貫き通すこ

とは、私にとって頭では理解できても、今の社会を生きる生活者感覚としてまでは消化しきれなかった。やはり、子どもの好奇心や才能は、自分の責任で気がついたときに開花するという考え方には異論が残る。子どもには、子どもとしての感受性がある。だが、その感受性を開花させるための基礎知識の習得や課題も必要であり、重要であると私は感じる。ダニエル流に言えば、それは効率を求める近代思想なのかもしれない。しかし……。

その後ろに小さい子どもたちもまねをしてついでくる。何かうなり始めた。卵を産んだのだ。それにならって、後ろの子どもたちも低い声で声を上げながら卵を産んでいた。リアルだ。
遊ぼうと思えば、どこでもいつまでも遊んでいられる。一方、校舎の中は、壁という壁は本棚になっていて、学ぼうと思えば学べる。もしかするとこれが新しい社会の学びの場なのかもしれない。まだまだ、私の中で納得しきれないのだが、私の中の波紋は広がるばかりだ。すべての訪問校を紹介できないが、二宮金次郎をシンボルにする勉強中心の学校もあった。とにかく、多彩な学校がある。この多様なチャータースクールの中に、私は学びの場の将来をかいま見ることができたと感じている。